

こどもたちに伝えたい

絵本・本・映画

杉並ゆりかご保育園では、毎年「平和のための納涼の集い」を行ってきましたが、コロナ禍の影響で昨年からやれないでいました。今年は、平和について保護者や子どもたちと一緒に考えて行ければと思い、今回保護者のご協力のもとに幼いころの平和についての絵本紹介をして頂こうと思いました。

戦時中の日本は「お国のために死んで来い」という教育（教育勅語）を受けていました。子どもたちの生きる権利・学ぶ権利どころではない時代。ましてや子どもたちに絵本を読んで聞かせたり、絵本を買い与えたりすることもままならない時代でした。

戦後、子どもたちに良い絵本を読ませたいという運動が全国的に広まりました。長い戦争がおわったあとには、『赤とんぼ』（1946 年～）、『銀河』（1946 年～）など、良心的な児童雑誌がつぎつぎに創刊されました。

そういうかたちで発表の舞台は用意されたものの、作家たちは、戦後の新しい現実にあふさわしいテーマを描き出す方法をすぐには見出すことができず、創刊された雑誌も、それぞれ終刊に追い込まれていきます。

現代児童文学の時代を準備したのは、1950 年代の議論でした。童話の時代の作家たち、特に小川未明や浜田広介の仕事を批判的に検討するなかで、新しい子どもの文学が模索されました。このころの議論をまとめた評論に、古田足日の『現代児童文学論』（1959 年）や、石井桃子他『子どもと文学』（1960 年）があります。1950（昭和 25）年には、『岩波少年文庫』の刊行がはじまります。海外の古典的な作品だけでなく、同時代の作品の翻訳も積極的に取り入れた、このシリーズは、創作児童文学にも大いに刺激を与えました。

日本の現代児童文学が成立したのは、1959（昭和 34）年だと考えられます。この年には、佐藤暁（のち、さとると表記）の『だれも知らない小さな国』、いぬいとみこの『木かげの家の小人たち』が刊行されています。どちらも、小人の登場する長編ファンタジーで、戦争体験が下じきになってもあります。これらは、それまでの童話の時代の作品とはまったく違うものでした。

童話が心の中の景色を描いたのに対して、現代児童文学は、散文的なことばで子どもをめぐる状況（社会といってもよい）を描こうとしました。現代児童文学は、かつて経験した戦争も、戦争を引き起こす社会についても書かなければならなかったのです。

先に発表された、いぬいとみこ『ながいながいペンギンの話』（1957年）は、散文的な文章による幼年童話の試みです。散文性の獲得は、子どもをめぐる事件を順序立てて語ることであり、児童文学の長編化をまねくことになりました。

編集社も「子どもにとって良い絵本」とは、を考え続け、福音館は、内容はもとより、絵もリアルに近いものを探求し続けてきました。

そんな中で子育てをしてきた、市川しょうさん（しか組）のおばあちゃんから子どもの頃によく読んで聞かせたという絵本を紹介してもらいました。



「はらぺこあおむし」

にちようびのあさにうまれたあおむし。

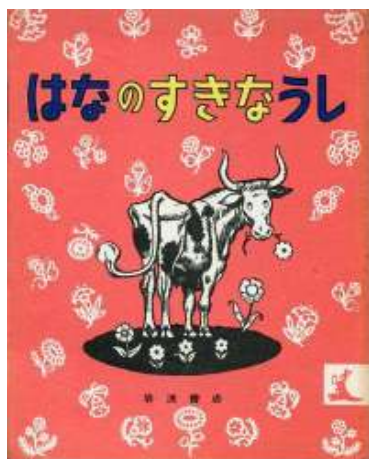
おなかがぺこぺこなあおむしは毎日いろんなものを食べます。げつようびはりんごを1つ、かようびはなしを2つ…

そしてあおむしはどんどんおおきくなってちょうへと成長します。



「ちびくろさんぼ」

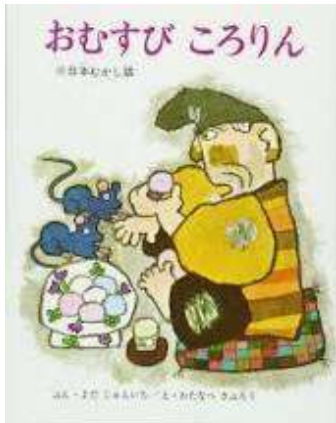
お母さんに作ってもらった服を着て、お父さんが市場で買ってきてくれた靴を履き、傘をもってジャングルへ散歩に出かけたさんぼ。しかしジャングルに行くとトラが出てきて、さんぼを食べようとします。さんぼは自分の身の代わりに、お母さんに作ってもらった服をトラに渡しますが、この後もジャングルではトラが次々に出てきて身に付けていたものをすべてとられてしまいます。さんぼはどうとう自分がトラに食べられてしまうと思いますが、トラたちはさんぼにもらった服や靴、傘を身に着けたトラはそれぞれ自分がジャングルで一番立派だ！とケンカがはじまっていた。



「はなのすきなうし」

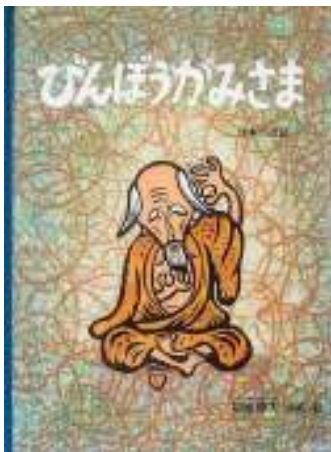
スペインにフェルジナンドという仔牛がいました。他の仔牛のように跳ね回って遊んだりせずにいつも一人で花の匂いを嗅いで静かに過ごしていました。

やがて時は過ぎ大きく成長したフェルジナンドはやはり一人花の匂いを嗅いでいました。ところがある日偶然による勘違いから闘牛にもってこの猛牛と評価されて闘牛場へ連れて行かれることになってしまいます…



「おむすびころりん」

おじいさんは山に行き、お昼におばあさんが握ってくれたおにぎりを食べようとした時、おにぎりがころころ転がっていってしまいます。必死に追いかけますが、穴に入ってしまった。穴をのぞくと自分も入ってしまい、穴の中には白いねずみが居ました。おむすびのお礼に小さいつづらを渡され、見てみるとたくさんの財宝が！隣のじいさんがそれを見て、わざと穴に落としますが穴から追い出されてしまいました。



「びんぼうがみさま」

あるところに、貧乏な夫婦がいた。どんなに働いてもなかなかお金がたまらない。気落ちしながらも、大晦日に家の掃除をしていると、押し入れの中に小さなじいさまが座っているのに気がついた。それは貧乏神様だった。貧乏神様は夫婦に、大晦日の晩、金銀銅の神様がやってくるので、どれかをつかまえば、お金ができると教えてくれる。ところが……。



「3匹のやぎの がらがらどん」

橋の向こう側の山で、たくさん草を食べようと考えた3匹のヤギ。小さなヤギ、中ぐらいのヤギ、大きなヤギ、みんな名前は「がらがらどん」。橋をわたっている途中に谷に住むトロル（おに）にでくわしてしまいます。小さなヤギの機転によって、小さなヤギと中ぐらいのヤギはトロルから逃げて橋をわたることができました。いちばん大きくて強いヤギはトロルに勝負を挑みます。3匹のヤギは無事に橋をわたることができるのでしょうか？



「ぐりとぐら」

お料理することと食べることが何より好きな野ねずみのぐりとぐらは、森で大きな卵を見つけました。目玉焼きにしようか卵焼きにしようか考えたすえ、カステラを作ることになりました。でも、卵があまりにも大きくて運べません。そこでフライパンをもってきて、その場で料理することになりました。カステラを焼くにおいにつられて、森じゅうの動物たちも集まってきます……。みんなの人気者ぐりとぐらは、この絵本から生まれました。



「おおきなかぶ」

おじいさんが植えたかぶが、甘くて元気のよいとてつもなく大きなかぶになりました。おじいさんは、「うんとこしょどっこいしょ」とかけ声をかけてかぶを抜こうとしますが、かぶは抜けません。おじいさんはおばあさんと呼んできて一緒にかぶを抜こうとしますが、かぶは抜けません。おばあさんは孫を呼び、孫は犬を呼び、犬は猫

を呼んできますが、それでもかぶは抜けません。とうとう猫はねずみを呼んできますが……

広島出身の小倉穂さんのお母さんが紹介してくれた「平和」を伝える絵本。

広島の子どもたちは平和教育をしっかりと受けています。子どもの頃から「ヒロシマ」という映画も見えています。「そんな映画を見てトラウマが」という人もいますが、全くそんなことはないです。と、語ってくれました。



「おこりじぞう」

広島市への原爆投下の悲劇を主題にした、平和祈念テーマの人形アニメーションの名作。昭和 20 年 8 月 6 日。その朝、6 歳の誕生日を迎えた女子ひろちゃんは、いつものように近所の「笑い地蔵」のところに遊びに行った。だが午前 8 時 15 分、閃光と大音響、衝撃の中、市街は一瞬で壊滅。ひろちゃんも背中に大火傷を負ってお母さんの名を呼びつつ、苦しみながら水を求めた。その時…



「風が吹くとき」

老夫婦のジムとヒルダは田舎町に引っ越し、のんびりと年金生活を送っていた。そんなある日、政府から 3 日以内に戦争開始の勧告があり、ジムは政府推奨のパンフレットを基に家のドアで家庭用核シェルターを作り始める。そしてラジオで 3 分後に敵国のミサイルがイギリスに到達するという放送が流れた後、町はものすごい爆風にさらされる。

「はだしのゲン」



主人公中岡ゲンは 9 歳。小学校 2 年のわんぱくざかりです。下駄の塗装を生業にしながら戦争に反対しつつける父と心やさしい身重の母と姉と弟に囲まれ貧しいながらもいたわりあって暮らしていました。

しかし 8 月 6 日、広島に原爆が投下され一家の生活は文字どおりメチャクチャに破壊されてしまうのです。偶然にもゲンは寄り掛かっていた塀が熱線を防いだため、そして母、君江は二階の物干し台におり長いひさしが熱線を防いだ為奇跡的に助かりました。しかし…

「黒い雨」



三方を山に囲まれた高原にある小畠村。広島県の蘆田川と岡山県の小田川に注ぐ分水嶺です。過疎化が進むその小畠村に住む閉間重松（しずま・しげまつ）は、数年来、姪の矢須子（やすこ）が原爆病患者であるといううわさに心を悩ませています。また、重松と妻のシゲ子が矢須子の原爆病を隠しているともいわれており、矢須子に縁談があっても、聞き合わせに来る人がそのうさを聞きつけ、縁談を断られてしまっていました。

「この世界の片隅に」



1944 年広島。18 歳のすずは、顔も見たことのない若者と結婚し、生まれ育った江波から 20 キロメートル離れた呉へとやって来る。それまで得意な絵を描いてばかりだった彼女は、一転して一家を支える主婦に。創意工夫を凝らしながら食糧難を乗り越え、毎日の食卓を作り出す。やがて戦争は激しくなり、日本海軍の要となっている呉はアメリカ軍によるすさまじい空襲にさらされ、数多くの軍艦が燃え上がり、町並みも破壊されていく。そんな状況でも懸命に生きていくすずだったが、ついに 1945 年 8 月を迎える。

「ひろしま」



物語の舞台は、原爆の悲劇から 7 年の月日が経った広島。女子高校生のみち子が授業中に鼻血を出して倒れることから、物語は始まります。ちょうどそのとき、授業では原爆がテーマの「0 の暁」というラジオを聞いており、原爆投下に向かうアメリカ軍の飛行士の心情が読み上げられていました。幼い頃に原爆投下を経験したみち子にとって、この授業はあの日のつらい記憶を思い出させる非常につらい内容でした。みち子が倒れたのは、精神的なショックだけが原因ではありませんでした。みち子は原爆症による白血病に苦しんでいたのです。

（おわりに）

世界中から戦争がなくなる日が来るのでしょうか・・・？今も戦争は、どこかの国で起きています。この時間にも恐怖を感じ、怯えながら生きている人がいます。戦争の犠牲者は、無抵抗な子どもや高齢者。なぜ、人は、人を殺し、殺されるのでしょうか？「誰しものが戦争は、いけないこと」とわかっていてもなぜ、戦争がなくなるのでしょうか？

暴力からは、暴力しか生まれません。戦争は、憎しみしか生み出さず、さらなら報復を繰り返し、人間のエゴのために利益を得ようとしします。

今、この子たちが将来戦争へ行く時代になってしまったら・・・。そんな時代だけには、したくないですね。それは、大人の責任でもあります。愛情の反対は、無関心です。

日本は、唯一の被爆国。しかし、その日本が世界に核兵器廃絶をアピールすることができていない。NPT（核兵器廃絶条約）国連の会議にすら日本は、出席していないのです。無知、無関心が過去の過ちを繰り返してしまう恐れがあります。そんな、時代には、絶対にしてはいけません。

日本には、憲法9条があります。9条があるから日本は、戦後戦争で誰一人として殺し、殺されていません。その9条すら変えようとする動きが大きく行われようとしています。

一人の力は、微力でも無力ではありません。一緒に考えてみませんか？私たちに何ができるのか。

貧困問題、環境破壊、コロナ禍、人種差別などなど、今こそ世界中の人たちが手を取り合って協力しながらこの難関に取り組んでいかなければいけない時代だと思います。